

<スクールソーシャルワーカー養成課程 キックオフ・シンポジウム 記念講演>

スクールソーシャルワーカーの実際と魅力

講 師：門田光司氏（久留米大学教授）

日 時：2016年10月8日（土）14時40分～15時50分
場 所：熊本学園大学14号館 高橋守雄記念ホール

こんにちは、久留米大学の門田光司と申します。よろしくお願いたします。スクールソーシャルワーカーの実際と魅力についてお話をさせていただきたいと思います。

私がスクールソーシャルワーカー研究を始めたのは、1995年に、北九州市教育員会の独自事業で、支援を要する中学校の巡回相談をしたことによります。この事業の中で中学3年生の女の子との出会いがありました。

ある中学校に6月ぐらいに出向いて行った時です。校長先生から「5月にご両親が離婚されて以降、生活態度が乱れている女子の中学3年生がいるんだけど、ちょっと会ってくれないか」と言われました。私は「いいですよ」と返し、教育相談室でその生徒と待ち合わせました。金髪の髪に、はだけた服装姿でやって来た彼女はいろんな話をしてくれました。しかし、その内容は私の心にとっても強く刺さるものでした。両親にはそれぞれ愛人がいました。そのため夫婦の関係が悪くなっていました。彼女には小学校1年生と4年生の弟がいます。お父さんの愛人は、彼女と同じ中学校の母子家庭のお母さんです。5月に離婚された後、お父さんはその方の家に転がり込んでいきます。お母さんの愛人は若い20代後半の男性で、離婚後、その男性を家に引き込んでくるわけです。彼女には、「卒業したら高校に行って看護師になりたい」という夢がありました。しかし、両親が離婚されて、経済的余裕がないとのことで、お母さんから「あなたは高校には行かせられない」と言われ、彼女がやけになるのは自然なのかもしれませんね。

彼女は、段々、夜遊びをし、時にはシンナーを吸いました。でも彼女はとても弟思いだったから、夜はそれ程遅くまで遊び歩かずに帰って、弟たちのご飯を用意してあげたり、朝は登校を促したりしていました。しかし、中学校の教室は受験体制に入っていく中で自分だけは未来を描けない中で、彼女は段々やけになっていきながら、学校でも反発をしていくようになります。中学生にとって出口の見えない苦しい状況にある場合、時に考えるのが死です。彼女はある夜、メンバーたちと遊んだ後、学校の近くにある深い池で自殺を試みました。胸元まで池の中に入って行った時です。彼女の後ろで「おい、何してるんだ！」という声がかかったわけです。彼女が振り向くと、これも本当に良かったと思うんですが、その中学校で子どもたちの話を親身に聞く生徒指導の先生が立っていらっやっったんです。その姿を見て彼女は「もう体中の力が抜けて、涙がぼろぼろ、ぼろぼろ出て来て、号泣しな

から『先生！』って言いながら、その先生に走って抱きついて行った」そうです。

学校は常に彼女の家庭環境は把握しているけれども、彼女の家庭へのアプローチは学校として難しい。ですから先生は朝方まで彼女の話聞いてあげて、「もし何か相談があればいつでも相談にのってあげるよ」といつてくれたそうです。だから彼女は「私はもう死のうとは思わない」と言いました。でも、卒業後のことについては、家を出て働くということを考えるしかない。学校は保護者にコンタクトを取ろうとするんですが、校長先生の話では、お母さん、お父さんは学校には一切コンタクトを取らない。学校は進路の話をしていかなければいけないから、出口が見えない状況があったわけです。そんな中で彼女のいろんな話を聞いていく中で、彼女は自分が仕事をしてお金を貯めたら、自分が叶えられなかった夢である大学進学を弟たちには実現させてあげたい。そして自分が結婚したら幸せになるんだ、子どもができたなら自分の子には不幸なことはさせない。そして「子どもが自分の手を離れた時にやりたいものがある」って言ったんですね。「何？」って聞いたら「ホームヘルパーになりたい」と。このような、彼女の思いを、夢を叶えられるための何か支援ができないものかと考えました。それが私のスクールソーシャルワーカー研究の始まりです。

今日は学生さんが多いので少しスクールソーシャルワーカーの基本的な話をしたいと思います。スクールソーシャルワーカーの起源はアメリカにあります。1900年代当時は、多くの移民がアメリカ大陸に向かって来ました。子どもたちの問題はまさに貧困問題でした。子どもたちは親よりも英語を早く学ばし、児童労働問題が法律上規定されていなかったので、工場が安い労働賃金で子どもを雇うために、学校に行けない子どもたちは日中仕事に就きます。その中で、現在の日本の貧困でもそうなんですが、子どもたちの貧困状況を抜け出していくためには何が必要なのか、それは教育です。高等教育を受けることがとても大切なことになるわけです。

19世紀後半から20世紀初頭というのは、ニューヨークやシカゴ、ボストンなどの大都市には多くの移民があふれかえり、仕事にもあふれてしまいます。人口密度がとても凝縮されて、6人に5人が窮屈な貧民アパート、テネメントと言いますが、そこに押し込められて住居環境は最悪で不潔な状況です。そして、貧しい家庭の中には、子どもたちが働いて家庭を支えるという状況もあるわけです。これは当時の写真になりますが、ジャガイモを集める仕事をしている写真です。子どもの貧困とか児童労働問題への対応、教育機会の保障をしていくうえで、アメリカではセツルメントハウス、特に「ハルハウス」のワーカーたちが取り組み始めます。子どもたちは自分の状況に対して、改善に向けて自ら声を出すことは難しい。ジェーン・アダムスとワーカーたちは厳しい家庭環境にある子どもたちの思いを代弁します。ソーシャルワークでは「アドボカシー」と言いますよね。ソーシャルワーカーにとって欠かせない役割は、この「アドボカシー」と、状況を改善していくために州政府・行政機関にアクションをかける「ソーシャルアクション」です。そのような取り組みをハルハウスのワーカーを含め、いろんなセツルメントハウスのワーカーたちが始めていったわけです。そして、学校と家庭に、子どもたちの教育の必要性を子どもたちに代わってセツルメントハウスのワーカーたちが代弁、アドボカシーしていく、という動きが出始めてきたのが、1906年～1907年、ニューヨーク、ハートフォード、ボストンです。それぞれ互いに連携があったわけではありませんが、各所で動き出したと

ということになります。当時はスクールソーシャルワーカーとは名乗ってなくて「Visiting Teacher」、すなわち訪問教師です。これは学校の先生ではなくて、学校に関わるという意味で teacher をつけています。大切なのはこの visting です。ソーシャルワークで言うアウトリーチですね。家庭訪問などいろいろな機関に向向いて行って取り組んでいくというところに役割があります。では次のスライドに行きます。

京都大学の倉石一郎先生が2014年に『アメリカ教育福祉社会史序説』というビジティングティーチャーの歴史の本を出しておられます。学問上とても貴重な本だと思います。この本の中に当時のビジティングティーチャーは何をしていたのか、かなり詳細に書かれています。

1918-1920年度の報告では、訪問教師の主な活動は「訪問」または「クリニック」「インタビュー」「記録」「統計」に分類されています。訪問先は家庭とか学校、特に家庭訪問は全体の半数以上を占め、子どもの置かれた生活状況の確認や子どもの福祉を阻害するいろいろな影響を除外するために取り組んでいくというのが目的だったと書いています。これは今のスクールソーシャルワーカーの活動の基盤にもなっています。訪問先の学校では校長や教頭先生、教師との協議、または病院や少年裁判所または救済機関などの機関へと出向いてネットワークを作っていくという活動をしていったわけです。対象とする子どもたちは、主に日中学校に行かない子ども、日中遊び歩く子どもや児童労働に駆り出される子どもです。その親御さんに教育の必要を説いていく。また、アメリカの先生は日本の先生と比べて授業だけを主にしますから、家庭環境のことは分かりませんので、学校の先生方に子どもたちの家庭環境のことを説明していく。まさに学校と家庭の間を繋ぎ、さらにその基盤としてはアウトリーチを行っていきました。

アメリカのスクールソーシャルワーカーの歴史は1906年から始まり100年以上もありますから、スクールソーシャルワーカーの専門性も少しずつ変わっています。現在、スクールソーシャルワーカーは何をしているのか？ということです。ここにスクールソーシャルワーカーの全米調査結果があります。アメリカのスクールソーシャルワーカーは女性が多いですね。先ほどの訪問教師も女性が多かったみたいです。日本の養成課程との違いは、アメリカとカナダでは基本的にはソーシャルワーカーは大学院修士課程で養成をします。ですからスクールソーシャルワーカーはソーシャルワークの修士号を持っているのが87%です。かなり専門性は高い。配置先は小学校が44%、中学校が18%です。アメリカは基本的に高校まで義務教育になりますので、小中高にスクールソーシャルワーカーがいます。先ほどのビジティングティーチャーは主に小中学校で活動していたので、その歴史から小・中学校が主なのかも知れません。担当する学校数は指定された一定の小学校とか中学校です。担当数は1校が40%で、最大4校までです。昨年、カナダのトロント市に行ってスクールソーシャルワーカーに聞くと、トロント市の最大担当校数が5~8までで、この数は組合で決めていると言います。それ以上の数を担当すると直接支援ができないからということです。

アメリカでは、生徒問題の第1位は暴力問題ですので、行動面とか情緒的なメンタルの面での相談が50~60%です。ですから、出席上の問題というのはあまり関わっていません。ただ、本日は時間がないのでアメリカの学校についてはいつか機会があればお話ができればと思いますが、特に

知っていただきたいのが、アメリカのスクールソーシャルワーカーのほとんどはスクールカウンセリングを主な業務としています。併せて家族支援です。または教室の中に入って、ソーシャルスキルトレーニングなどのワークショップもします。訪問教師の活動から100年経ってアメリカのスクールソーシャルワーカーの業務が大きく変わってきている状況があるかも知れません。ちなみに皆さんの資料にはありませんが、スライドの写真ですが、これはアメリカ、シカゴの学校でK9ですね。Kってというのは幼稚園のkindergartenです。9ってというのは中学3年生です。ですから、一つの建物の中に幼稚園から中学3年生までいるわけですね。このような学校に行きますとクラス人数が15~16名くらいの集団ですので、日本の授業の雰囲気とは大きく違いがあります。そして、学校の中にスクールソーシャルワーカーの部屋があります。そこに子どもたちが来て、子どもたちと面談をしていくということになります。

韓国でも同様です。例えば、スライド写真ですが、韓国はスクールソーシャルワーカーという名前を使わずに学校社会福祉士と言います。学校に行きますと、同じように部屋がありますが、この入口の部屋が学校社会福祉士、スクールソーシャルワーカーの部屋になります。韓国のスクールソーシャルワーカーの活動として興味深いのは、スクールソーシャルワーカーの部屋に昼間何名かの子どもたちが来て過ごします。スクールソーシャルワーカーの部屋が子どもたちの居場所であって、子どもたちが自由に話に来て、スクールソーシャルワーカーたちも一緒に話をして、中に気になる子どもさんがいたら個別的に相談にのっていくというかたちです。右側の奥の方は面談室があります。次の写真ですが、韓国の小学校ではスクールソーシャルワーカーの部屋に遊び場を作っているところがあります。

現在、世界40か国以上にスクールソーシャルワーカーが活躍しています。でも、国々によってスクールソーシャルワーカーの動き方に違いがあります。それは学校教育制度が違うからです。そこで日本のスクールソーシャルワーカーはどんな役割を担っていくのか、我が国での学校ソーシャルワークの実践を知っていく必要があります。学校現場に入るということは、スクールソーシャルワーカーは部門外でありますので、当然学校のことを知る必要があります。そのためには日本の教育制度や学校文化、さらには私は福岡県ですけれども福岡県の文化、または熊本県ならばその学校教育文化があります。そして大切なのは学校でソーシャルワークを実践する、ということです。学校の中に先生方は集団として多くいらっしゃいます。外部としてはスクールカウンセラーである臨床心理士が1人入ります。スクールソーシャルワーカーも1人で学校の中に入っていきますので、実践的な即応的な能力・技術が求められます。今後、学校はいろんな多職種がチームで取り組んでいくことが求められますので、キーワードは日本においては多職種の協働、英語ではCollaborationって言いますよね。ですから、アメリカのスクールソーシャルワーカーと違って、日本のスクールソーシャルワーカーに求められる技術とかスキルには日本の特徴があると思います。

そこで日本の学校文化として、福岡県の話を見せてもらいます。福岡県には産炭地が多く、例えば炭鉱の子どもの学校史を読んでいると、貧困問題が学校でも大きな課題です。例えば、次の資料、1959年の福岡県教職員組合が出された調査ですが、産炭地の子どもと産炭地でない子どもの比較デー

タがあります。資料の黄色の所を見ていただくと、産炭地の子弟の子どもの長期欠席数がとても多いですね。その欠席の原因は、家事手伝いとか、学用品、ノートや鉛筆が揃わないので学校に行きたくないとか、給食費等も含めての諸費納入の難しさ、学校に行っても勉強がわからないので嫌いという理由が挙がっています。では次のスライドに行きます。

学用品とか通学用品を持って来ない子どもの比率です。ここも先ほどの続きですが、産炭地の子どもにおいては、そうでない家庭の子どもよりやっぱり持って来ない比率が高い。筆入れとかノートとか雨具、下着、等ですね。さらには欠食状況です。同じように食事を満足にしていないとか、遠足に行けないとか、弁当を持って来ないという比率も大きく上回っています。福岡県の産炭地域のような子どもが学校になかなか足が向かわないという状況や非行を犯す子どもに対し教師たちはどのように取り組んでいったのか。

福岡県においては、担当教科を持たない「補導教諭」という方がいます。これは法令上の規定がない役職ですが、非行事案が発生する度に警察は学校の先生に呼び出しをかける。補導をした子どもの引取に警察が保護者に連絡を入れても保護者は子どもを引き取りに来ないわけですね。そうすると学校に連絡をしてくる。その度に授業をしている先生は自習にし、子どもを警察に引き取りに行かないといけない。または、生徒の外泊、家出、集団窃盗の場合、先生は夜遅くまでその対応に飛び歩かないといけない。その間、自分の担任する授業に関しては自習になるから、これでは授業にならない。そこで法令上、何の規定もないけれど、必要性から福岡県では「補導教諭」が生まれます。現在も福岡県ではこの補導教諭はいらっしゃいます。でも、この補導教諭の活動は家庭訪問、または子どもたちの溜まり場への訪問、生活保護費の事務支援、さらには就学援助に関する教育委員会との交渉。家庭訪問で親が不在の場合には親の居場所に訪問したり、非行防止会議や家庭裁判所、児童相談所、保護司と協議をする。まさに、先ほどの訪問教師（Visiting Teacher）と同様で、スクールソーシャルワーカーと同じような活動をしています。ですから、福岡県においてスクールソーシャルワーカーは補導教諭と同じ動きをしていたら必要性はないと言われます。そこに、ソーシャルワークをしていくことによって、スクールソーシャルワーカーの必要性をどうアピールして行くかが実践上の課題になります。次のスライドに移ります。

日本では、昭和40年代に中学校の学習指導要領の中に総則で「生徒指導」という内容が明記され、併せて「教育相談」も明記されます。この教育相談は英語の「カウンセリング」を教育相談と訳し直したものになります。この中で、日本の先生方の教育文化とかかわる生徒指導ですが「生徒の社会生活は、学校内だけではなく、家庭においても、また校外の一般社会においても絶えず営まれている」ということなので、生徒指導の先生は家庭訪問も地域の支援もされているわけです。ここに、日本の先生方はフィールドがとても広いということになります。アメリカとカナダに行くと、スクールソーシャルワーカーたちに日本の先生の話をする、冗談交じりにおっしゃるんですが、「日本の先生はスーパーマンだ」と言われますね。でも、それはやっぱり、日本の学校の先生方の教育文化だと思

ます。では次のスライドです。

ここにアメリカの学校文化との違いがあります。日本では1980年代から非行の第三ピークがやってきます。併せて不登校問題が起こってきます。「不登校」というのは日本の名称です。アメリカとかカナダには不登校はいません。日本の場合は学校という建物の中で教育が保障されているからです。それに対して、アメリカとかカナダは個人に対して義務教育法という教育が保障されているので、最終的に家にいる子どもにも教育を保障する上で教師が来るということですね。ですから、義務教育の観点が違うのです。でも日本の場合は教育の保障は学校の中でされているので、年間30日以上欠席をしてしまうと不登校という状況になります。不登校支援は、日本のスクールソーシャルワーカーにおいても、学校においても、大きな課題だと思います。そして、日本では、1987年に法制化された社会福祉士及び介護福祉士法においてソーシャルワーク教育が始まっています。では次のスライドになります。

日本において、平成7年に、とても大きな問題として、いじめ問題による自殺という深刻な状況が起きてきました。この中で初めて外部の専門職を入れるということでスクールカウンセラー事業が始まりました。スクールカウンセラーの職務内容は児童生徒への「カウンセリング」と位置付けられ、明記されています。このところは後でスクールソーシャルワーカー活用事業のところと対比させたいので覚えておいてください。しかし、スクールカウンセラー事業が始まりましたが、学校における問題は、不登校問題、いじめ問題、非行対応、発達障害の子どもさんたちへの支援、さらには児童虐待への対応、そして保護者への対応など、多様な問題を抱えているわけです。特に私たちの社会の中でとても衝撃的だった事件が1997年(平成9年)の神戸市須磨区の小学生殺害事件です。捕まった加害者が中学生だったというのは、とても大きな衝撃的な事件でした。これに対して1998年、当時の文部省は学校の「抱え込み」からより地域に開かれた「連携」へ、ということを提案していくことになります。

さらに2001年(平成13年)、これも大きなとても衝撃的な事件でした。大阪教育大学附属池田小学校の児童殺傷事件が起きました。この事件を受けてさらに文部科学省は2001年に、連携からより可動性のある行動連携ですね、つまりチームとして動いていくことへの方向転換を始めました。担任の先生を中心とした学校教育文化から学校はチームを組んで子ども支援に係っていくということですね。しかし、チームを組むといった時にいろんな各職種がありますので当然必要になってくるのがコーディネーターです。誰がコーディネーターをするのか。音楽で言えば演奏の際に様々な楽器がありますが、誰がその指揮者としての調整役になっていくのかということです。日本では2000年から香川県や茨城県でスクールソーシャルワーカー事業を単独でするところが始めました。文科省はこの辺りからスクールソーシャルワーカーに関する情報を集め始めていたと思います。

いよいよ2008年度「スクールソーシャルワーカー活用事業」が始まります。先ほどのスクールカウンセラーのところでお話した、スクールカウンセラーはカウンセリングを行うことと謳われてい

るんですが、文科省におけるスクールソーシャルワーカー活用事業では、広義ですけれども「教育と福祉の両面に関して、専門的な知識・技術を有するとともに、過去に教育や福祉の分野において、活動経験の実績等があるもの」と位置付けています。社会福祉士とか精神保健福祉士という文言は一言も入っていません。現在は「社会福祉士とか精神保健福祉士を採用することは望ましい」という文言はありますね。これによって2008年がスクールソーシャルワーカー誕生の年になるんですが、社会福祉士や精神保健福祉士を持ってスクールソーシャルワーカーになっているのが当時は約4割です。残りの5割の方々は退職後の教員がスクールソーシャルワーカーとして活動しているということになります。九州では、熊本県と福岡県は、スクールソーシャルワーカーは社会福祉士、精神保健福祉士ですが、他県においては退職後の先生がなられている現状があります。

実際のスクールソーシャルワーカー業務としては、1. 問題を抱える児童生徒が置かれた環境への働きかけ、2. ネットワークの構築、連携、そして、3. 学校内におけるチーム体制の構築、とあります。しかし、ここに一言もスクールソーシャルワーカーはソーシャルワークを実践するというのは書かれていないんですね。私はこれはとても残念なことだと思います。やはりソーシャルワーカーが専門とするのはソーシャルワーク実践だからです。

では次のスライドになります。スクールソーシャルワーカーの人材養成に関しては、アメリカと日本の違いがあります。アメリカでは基本的には専門職大学院という修士課程でスクールソーシャルワーカーを養成していきますが、日本の場合のスクールソーシャルワーカーは国家資格である社会福祉士、精神保健福祉士が基盤になっています。このようにアメリカやカナダにおいては社会福祉士、精神保健福祉士というのはありません。お隣の韓国は日本と同じように社会福祉士とか精神保健福祉士があります。このような違いを考えた時に日本においては、社会福祉士や精神保健福祉士は、大学生の皆さんが大学で学んでいるように、児童福祉法とか障害者総合支援法、その他の法律とその福祉サービスに関する知識を有しソーシャルワーカーとして現場で活躍しています。大学生の皆さんも大学卒業した後の職業をイメージして、しっかりと法令とか福祉サービスを学んでもらいたいと思っています。実際に学校の外で支援をする児童相談所にもケースワーカーがいます。福祉事務所の生活保護課にもケースワーカーがいますね。または医療機関においても医療ソーシャルワーカーが、精神科病院にも精神科ソーシャルワーカーがいます。障害のある方々の雇用とか、少年法における司法においてもソーシャルワーカーがいます。そうすると、学校外の福祉機関にいろんなソーシャルワーカーがいますので、日本のスクールソーシャルワーカーは、まさに学校と外部の機関をつなぐ役割が特徴としてあります。ここに繰り返して申し訳ないんですが、海外と違う日本のスクールソーシャルワーカーの特徴というのがあるんですね。次のスライドになります。

スクールソーシャルワーカーの役割は、子どもの教育を妨げる環境に働きかけ、取り組んでいくということになります。先ほど言いました、教育は学校で行われます。子どもたちは教育を通していろんな仕事を将来選んでいくわけなんですね。そうした時に、高等教育を受けることによって、いろんな職業を知り、自分が就きたい職業に向けて自己実現を図っていくわけです。しかし、残念ながら、冒頭でお話したように子どもたちにとって身勝手な親、崩壊した家庭環境を抱える子どもたちがい

ます。子どもは生まれてくる家庭環境を選べません。笑顔でほんとお腹いっぱい満腹に食べられて、教育も保障されている家庭もあれば、一方で生まれてきた環境によっては虐待を受けて早く命を失うかもしれないし、高等教育を受けたくても受けられない子がいるわけです。このような状況というのは、ソーシャルワークでは社会不正義と言います。不公平なのです。これにソーシャルワーカーたちは取り組む使命があります。

学校環境にもいろいろ問題はあるんですが、まずは家庭環境によって子どもが教育を受けられない、または妨げられる環境にあれば、この状況に取り組んでいく必要があります。それはスクールソーシャルワーカーの役割なのです。後でシンポジウムで実際的なお話が聞かれるかもしれませんが、スクールソーシャルワーカーが依頼を受ける状況も複合的な家庭問題が多くなります。親御さんの離婚、経済的な問題、生活保護であるとか就学援助、さらには保護者の方、特に母子家庭で支援を要する場合、例えば、お母さんが統合失調症であるとか躁鬱病であるとか、アルコール依存症や薬物依存症であるとかですね。これによって子どもの家庭環境が窮屈な状況になって、学校に足が向かわない状況もあつたりもします。さらにはネグレクトもあります。小学5年生の子どものいる一人親の事例ですけど、お母さんが1週間帰って来ないことがある。そうすると一気に児童相談所の関りが必要になるかもしれません。一方で、子どもの方は学校になかなか足が向かない。すると勉強が遅れてきて学校が楽しくない。さらには登校刺激を出して学校に連れてくると一日過ごすんだけど、登校刺激を出さないと家でゲームをしてしまう、という状態もよくあります。または非行系の子どもさんもいらっしゃいます。このような状況のなかで、学校に足が向かわないということになると、段々段々、学力が落ちてきます。これらの問題にも取り組んでいく必要があります。

ここで一つ事例をお話ししたいと思います。これは皆さん方のお手元の資料にはありません。事例は、中学3年生の女の子です。小学校6年の時に両親が離婚をし、母子家庭になります。生活保護を受給していて、お母さんは精神疾患、うつ病を患っています。本人が中学に入学後、両親が離婚され、その後、母親は家事を一切しない、または外泊をして、付き合っている男性と泊まり歩く状況になります。そんな不満から、家に置いておかれることが多い彼女の場合、イライラを募らせながら、それを発散する手段としてリストカットが頻繁に起きてきます。または学校の欠席、それが繰り返されてきます。学校に来て、授業中や保健室などでも突然リストカットをしてしまいます。そのため、学校としてはどのように取り組んでいくかに苦慮する状況になります。

担任と養護教諭の先生が本人の話をじっくりと聞く役となっていました。ある日、家の中でお母さんと大喧嘩になって、そのイライラから、いつも以上に手首を深く切ってしまって救急搬送になります。そして精神科病院の医療保護入院となります。病院に入院していた間は、当初は医師に対しても看護師に対しても、患者さんに対しても嫌悪的な状況だったんですが、日数が経って精神的に安定すると、お医者さんにも看護師さんにも、また、同室の患者さんたちとも会話が和やかにでき始めてきました。もう入院治療は必要ないだろうと、精神科病院を退院ということになります。でも、お母さんは一度も訪問はしていないんです。学校の方にも、いよいよ生徒が退院をしますという連絡が入りますが、彼女が退院をしても家の状況は何にも変わっていないわけですね。退院してくると、また

リストカットが起きてしまう可能性があることを学校は不安でしたので、スクールソーシャルワーカーに支援依頼がありました。

この場合、学校の困っている点としては、退院後母子が同居することによって、再度本人がリストカットする可能性が危惧されることです。そこで、スクールソーシャルワーカーへの依頼です。スクールソーシャルワーカーの見立てとして、課題としては1つめは母子の関係が不良である。本来、ソーシャルワークは人と環境との関係性で物事が起きていると考えますので、目指すところは、女の子とお母さんが仲良く過ごしてもらうことを最終目標におきます。ですから、お母さんが悪いとか、問題の犯人探しということではなくて、母子関係改善に目標をおくわけですね。ですから、どうしていったら母子間が良好になるのか、その仲介にスクールソーシャルワーカーが入るかもしれません。2つめは、母親も精神疾患、鬱病により育児放棄、家事炊事をしない、または生活能力が低いという面があります。3つめには、そういう家庭環境によって本人がとてもストレスが溜まってしまいます。精神的にとっても不安定になってくるので衝動的に自傷行為を起してしまう、ということがあります。そこで、スクールソーシャルワーカーは入院している状況で、退院する前にアプローチをかけていきます。スクールソーシャルワーカーは学校や関係機関から情報収集、アセスメントをします。児童相談所の方は本人のリストカットがあるために、児童養護施設等の福祉的な措置をしたとしても、本人も嫌がっているし、児童養護施設も対処がなかなか難しいと考えたようです。そこで、スクールソーシャルワーカーは、彼女が入院している精神科病院の主治医と精神科ソーシャルワーカーと相談をして、定期的に退院をするまでの間、本人と会い、そして、家庭訪問してお母さんと会うことで、まずは関係性を築いていくことにしました。

ここでスクールソーシャルワーカーは本人に初めて会うわけですが、最初に出会う、1回目のかかわり方はとても大切になります。もし本人が、こういう人とは二度と会いたくない、となったならばこの支援は途切れてしまうわけですね。ですから、常にスクールソーシャルワーカーは、最初の出会いというのをとても丁寧に介入していくことになります。最初はいろんな話ができるわけではないです。「スクールソーシャルワーカーです」と言って、病院で彼女に会っても「あんた誰？」ということになるわけですね。そこで、5分とか最初に短い時間でコンタクトを取りながら、10分、15分、少しずつ話をしていくわけですね。そんな中で、いわゆる「ラポール」という信頼関係を作っていくながら、基本的にはスクールソーシャルワーカーの大切にするのは子ども本人です。その本人たちの思いに耳を傾けながら聴いていくというのが基本になります。そうすると、少しずつスクールソーシャルワーカーに対して心を開いていった彼女はこう言いました。「お母さんの怠けが許せない。自分は児童養護施設には行きたくない。でも、できたら高校に行きたい。進学したい。」そうすると、スクールソーシャルワーカーは本人の思いとかニーズを尊重しますので「進学したい」という思いを受けとめながら、今後どうしていくかを本人と一緒に考えるんです。

一方で、スクールソーシャルワーカーは、お母さんにも会いに行きます。そして、直ぐに扉をピンポンと鳴らして、お母さんが出て来て「スクールソーシャルワーカーです」なんて会話が始まるわけではありません。時には居留守を使われる場合もあるわけですね。時には手紙を置いて「スクールソーシャルワーカーが来ました」というコンタクトを取っていくわけです。アウトリーチという言葉があ

りますけど、なかなか対応が難しい場合があります。けれどもそんな家庭訪問をしながら、お母さんと話して、最初は5分とか10分とか時間をのぼし、信頼してもらいながら関わっていく中で、お母さんの方から心の開きがあったわけですね。お母さんとしては「本人と過ごすのが、一緒に暮らすのがきつい、もう何もやる気がしない」「家で本人が私に向かって吐く暴言にもう耐え切れない。できるならば本人には公立高校に行ってほしい」と思う。

このように本人または母親の思いというのを受けとめながら次にスクールソーシャルワーカーは、学校でケース会議をします。ケース会議とは、また後でお話しますが、学校や児童相談所、他機関が集まって、そこで母子の状況改善とか本人の思いをつなぐためにどうしていくのかを考えていく場、ということになります。このケースにおいては、参加者は、校長先生、教頭先生、担任、養護教諭、生徒指導、スクールソーシャルワーカー、スクールカウンセラー、精神科ソーシャルワーカーが集まりました。そして、それぞれ役割分担に取り組んでいくわけです。退院後の支援計画として、家庭にはホームヘルパーを導入し、中学校ではしばらく保健室を居場所として、担任と養護教諭、スクールカウンセラーが本人の聞き役を担う。スクールソーシャルワーカーは本人及び母親の思い、またはニーズの聞き役を担いながら、本人が調子が悪い時には精神科病院と学校との間をつなぐというそれぞれの役割分担を決めていきました。

そして、このような支援計画を立てて、いよいよと本人が退院をしていきます。支援計画を実行していましたが、なかなか物事はうまくいきませんでした。本人が退院後は、本人自身が家出、ないしは大量服薬、または家庭でお母さんが生活保護費をパチンコ等に使ってしまって、公共料金が滞納されライフラインが止められてしまう。または、長期にお母さんが帰って来ない。その度にイライラした彼女はリストカットを繰り返す、という状況がありました。けれどもその度に学校と関係機関は、定期的に集まって支援計画を見直していきました。このような取り組みを継続していく中で、担任や養護教諭、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーがじっくりと本人の話を聞きながら、また、スクールソーシャルワーカーの方は母親の思いを受けとめていきながら、時にはお母さんに本人の悩みを伝え、一方でお母さんの悩みを本人につなげながら、まさに先ほど言いましたように、お母さんと本人の間に入って、母子との心の交流が図れるようにしていったわけですね。これによって、本人はお母さんが全く分かってくれないというわけではない。または、お母さんにとっても本人が身勝手に動いているわけでもないと感じるようになります。そうすると、段々段々、お互いの理解が深まっていきます。そして、これによって本人と母親の関係は少しずつ安定していきます。最初の母子間の関係の改善が目標であったんですが、この母子間の安定が図れていくようになってくると、次に子どもの目が向いていくのは進路です。本人は高校への進路希望を口に出してきます。ここから先は学校の役割になります。この本人が高校に行きたいという思いを学校の先生方が補充学習等つなげながら取り組んでいくということをなされていきました。

本人は時々、母親に対しての不満や卒業後の不安を、スクールソーシャルワーカーに面談の中で表出します。けれど、スクールソーシャルワーカーは精神科の主治医に本人の状況を説明し、主治医より助言をもらい、その助言を学校にも返していきながら、学校もそれに従って対応をしていかれました。高校受験前、本人は不安を高めていましたが、私立高校2校と公立高校1校に合格し、希望進路

を実現させました。その後、卒業に向けてケース会議を実施しながら、卒業により支援が終了しました。

現在文部科学省のスクールソーシャルワーカー活用事業予算は義務教育、小中学校です。今年度予算では高校での配置もあるのですが、全国で47名の予算しかありません。高校のスクールソーシャルワーカーの配置がとても少ないんですね。ですから、中学を卒業して次につなげていく上で今求められているのは、高校におけるスクールソーシャルワーカーの配置事業です。高校でのスクールソーシャルワーカー事業が充実されれば、まさに小、中、高へとつなげていけることになるかもしれませんね。さらに、高校卒業した後の次は、熊本学園大学にもいらっしゃる大学のキャンパスソーシャルワーカーまでつなげていけることが必要です。

なお、今の事例は福岡県スクールソーシャルワーカー協会より出版しました『スクールソーシャルワーカー実践事例集』（中央法規出版社）からです。本書は30の事例を入れていまして、できれば読んでいただければと思います。では次に行きます。

「今後のスクールソーシャルワーカー」です。昨年12月に中教審から、今後の学校における「チームとしての学校」というイメージが出されました。先生方においては授業に集中し、生徒指導上の問題を含めては教員以外の専門スタッフ、つまりスクールカウンセラーとかスクールソーシャルワーカーが、チームとして学校の中で一緒に取り組んでいく、という方向性が出されています。「学校の『抱え込み』から『連携』へ」、そして今度は、より具体的に「チームとして」動いていく、ということが謳われているわけですね。このようなチームというのは、海外の例を見ていくと、例えば私の調査研究のトロント市の場合では、子どもの課題、出席問題とか行動問題、いじめ、虐待、貧困…いろいろな問題がありますが、月1回、生徒サポート会議が開かれています。担任とか校長先生、スクールソーシャルワーカー、そしてスクールサイコロジストがいます。スクールサイコロジストというのは、学業上に遅れが見られる子どもさんとか、日本で言う発達障害、広汎性発達障害とかLDとかADHDの子どもさんにおいては小学校に入ってきた時に、担任教師がもしかして？となった時に、このスクールサイコロジストが心理検査等をします。こういう子どもさんにおいては特別支援教育が必要になりますので、心理学的支援の役割を担っていくのが、スクールサイコロジストですね。定期的に気になる生徒さんを月1回、生徒サポート会議で協議をして、予防ですね、前もって取り組んでいくということが行われるわけです。

これからの日本でも、児童生徒支援として、スクールソーシャルワーカーを含め、児童相談所、生活保護課、警察の少年課とか、いろんな職種がチームとして協働していくことになります。キーワードは「チーム」ということになります。例えば野球のチームの場合、9人の役割はピッチャー、キャッチャー、ファーストもセカンドもいますよね。このチームは何に向かうのかというと、当然そこには目標があるわけです。すなわち、優勝するという目標です。その目標に向かっていくためには何が必要なのか、チームには一緒に協力して働くという「協働」と、それぞれの「役割分担」です。例えば、ピッチャーが剛速球で毎回0点で完全に相手を抑え込んでも、誰も打たなければ試合は勝てません。

さらには、4番バッターがホームランをバンバン打ったとしても、それ以上にピッチャーが打たれてたら勝てないです。すなわち、それぞれの役割が協力して動いて欲しいわけです。ボールを打った時にショートがエラーした。そしたら、ショートを批判してしまうと、それは協働ではありません。「協働」という定義の中には、英語では workingtogether ですが、効果的な人間関係を通して一緒に取り組んでいくというのがあります。そして、「チーム」というのは2人以上の人が一緒に協力して働くことを意味します。ですから、先程の野球チームになると、みんなが、ピッチャーもキャッチャーも誰かがエラーしてもドンマイ、ドンマイということでカバーをし合っていく。これによってお互いの気持ちが意思統一されて、目標に向かって動いていくわけです。これを「チームとしての学校」で考えた場合、教職員、スクールソーシャルワーカー、スクールカウンセラー、児童相談所、その他の機関による協働支援となります。しかし、学校としては、子どもが児童相談所に一時保護されても学校には連絡もない。児相は何もしてくれない。一方で、児相は、学校はやんやんやうるさい、となると児相と学校は協働ができていません。ここに「協働」または「チーム」を組んでいくためには、それをまとめていく人がいるわけです。それがスクールソーシャルワーカーの役割、特に日本においてはスクールソーシャルワーカーに期待されている役割なのです。

実践の基本となるのは、ケースマネジメントです。アセスメントをして、支援計画を立てて、支援を実行して、また振り返っていく、という取り組みが行われていく。そして、何より大切なのはチームで動くためには「ケース会議」です。みんなが集まって、このケースをどう取り組んでいくのかを考えていく、というのが必要になってきます。一方で、チームとして取り組んでいくためには、スクールソーシャルワーカーの配置形態もとても大きく関係してきます。どれだけ学校にスクールソーシャルワーカーがどっぷりと入っていけるかです。今言ったように、チームを組むためには先生とスクールソーシャルワーカーが親しくないといけません。信頼関係です。定期的に学校で先生方と顔を合わせていく。時には学校の行事後に先生方との「飲みニケーション」にもスクールソーシャルワーカーが参加していくと、先生方との意思疎通がより図れるかもしれません。ですから、どのようなスクールソーシャルワーカーの配置形態にするのか。文部科学省は平成31年度までに中学校区にスクールソーシャルワーカーを1万人に増員させると言います。財源上の理由で実現するかどうかは分かりませんが、確かにキーワードは中学校区ということですね。ですから、一つの中学校とその校区にある小学校2から3校を担当するというスタイルです。

福岡での私たちの取り組みとして、福岡市は2008年度の事業当初から中学校区を拠点としていました。私は最初からこの事業に関わらせていただいています。このスタイルがいいと思って導入しました。この中学校区拠点巡回というのは、一つの中学校区内に2つないしは3つの小学校がありますが、Aという小学校を拠点として、B小学校と中学校を対象にするということになります。これによって、対象とする学校が2つから3つぐらいなので、直接子どもたちと関わり、家庭訪問し、直接支援ができていきます。そして、アウトリーチができていくということになります。例えば、現在、福岡市は27名のスクールソーシャルワーカーがいます。毎年2名、2名、2名と増員されて、今は27

名です。ただ、福岡市内の中学校数は69ですから、まだ足りない状況にはあります。福岡市のスクールソーシャルワーカーは小学校の拠点に行って、職員室にスクールソーシャルワーカーの机があります。先ほどのアメリカや韓国では日本のスクールカウンセラーみたいに別室があります。しかし、福岡市のスクールソーシャルワーカーには、チームの一員として学校に入ってもらいたかったので、拠点となる小学校の職員室に机を置いてもらっています。これによって、朝、先生方と話をしたり、ミーティングにも参加します。運動会行事では、小学校ではお揃いのトレーナーとかTシャツを作られますが、それを着て、運動会の準備をしていくわけですね。まさに学校の中にどっぷり入っていく。そして、子どもたちの支援として、学校の中でケース会議を開いていきます。福岡市のスクールソーシャルワーカーたちは週1回、ヤフードームのそばの福岡市子ども総合相談センター「えがお館」の中にあるスクールソーシャルワーカーの事務所に27名が集まります。この27名が9人ずつの3つのチームに分かれていて、それぞれ事例検討会を開いている状況です。それぞれのグループにはチーフスクールソーシャルワーカー（合計3名）を置いています。

後残り10分になりました。「スクールソーシャルワーカーの魅力」というところになります。私自身は、スクールソーシャルワーカーは社会福祉の専門職として学校でソーシャルワークが実践できる、ということだと思います。先ほど、文科省の目指すスクールソーシャルワーカー業務としては「環境に働きかけ」とありましたが、本来、ソーシャルワークは個人とか家族、グループへのマイクロレベルでの直接支援、団体・機関・地域というメゾレベルでの支援として関係機関のネットワーク、または地域福祉。さらにはマクロレベルでの学校教育施策へのコンサルテーションやソーシャルアクションなど、その支援領域は広域です。ですから、環境に働きかけるだけじゃなくて、ソーシャルワークを実践すると考えると、いろんな支援が展開できていくと思います。特に、現在の関心事として、子どもの貧困問題であるかも知れません。

次のスライドになりますが、昨年度、2015年の西日本新聞が九州圏の子どもの貧困率を挙げています。全国が15.6%、熊本が15.3%ですね。福岡県は23%、4人に1人です。ちなみに子どもの貧困率というのは、平成24年度の基準でいくと年収122万円です。ということはひと月10万円位の生活をしているわけです。熊本でも15%なので約6人に1人です。とても深刻だと思います。子どもの貧困によって、子どもたちが影響を受けるのは、高等教育が受けれるのかということ。阿部先生が2012年に「大阪子ども調査」を実施されています。この調査結果では、中学2年生の保護者の非貧困層と貧困層に聞いています。「将来、大学かそれ以上に行かせますか」となると、貧困層では52%が経済的に受けさせられないとなっています。そうすると、この時点で高等教育を諦めるということです。特に一人親家庭の子どもは、高校卒業後、進学しているのが41%、就職が33%、その他は決まらないまま卒業していつています。ソーシャルワークの視点から考えると、生まれた環境によって、ある家庭は高等教育が受けられるが、ある家庭は高等教育を諦めざるを得ないということは不公平なことです。スクールソーシャルワーカーは常に子どもたちやその家庭に関わりますので、子どもの貧困状況を目の当たりにすると、専門職として何らかの取り組みしていきたいとモチベーションが上がるのは自然かもしれませんね。

一方で、就学援助は、平成24年度、全国で155万人います。その比率は小中学生の15.6%です。ある家庭は、塾に通ったり、ピアノ、剣道などの習い事にお金がかけられる子どもさんいれば、制服や通学靴など最低限のものでさえ購入が難しい生徒さんもあります。経済的状况により、進学を断念し、やる気をなくしている生徒さんもあります。体操服を1着しか揃えられない家庭があったり、1週間同じ服を着ている、または臭いがする汚れた服で来る子どもたちもいるわけですね。それによって、クラスの中でいじめに遭う場合もあります。保護者が夜遅くまで働かなければならず、子どもの生活をしっかりと見守れない。または、子どもが心理的な不安から学習に集中できない、ということがあります。このように子どもたちの夢が経済的な状況によって諦めざるをえない、というのはやはり見逃せません。家庭においては十分な食事が食べれない子どもたちもいるわけです。朝、学校に来るまでに朝食を食べていない子どもたちもいたりするわけです。そこで、最近では子ども食堂の取り組みが新聞でもよく挙がっています。ただ、子ども食堂は、食べるだけではなく、子どもたちの居場所づくりが基本になります。経済力の低い家庭の子どもさんだけじゃなくて、今、子どもたちには居場所がないんです。この子どもたちの居場所を作り、そこで、時には食べるものがあったり、時には学習支援が入ったり、という地域の受け皿が今求められている。ここにソーシャルワーク実践を考えた時に、地域支援という視点でスクールソーシャルワーカーが取り組める要素があります。

2つ目の魅力ですが、これは個人的な魅力です。海外のスクールソーシャルワーカーたちに会える、ということです。3年ごとに1回、世界スクールソーシャルワーカー会議というのが行われます。その会議に参加しますと世界のスクールソーシャルワーカーたちの実践報告を聞くことができます。また、韓国に行くことがあって、この写真はソウルで韓国のスクールソーシャルワーカーたちと実践発表をしている場面です。この写真は、今年の夏、台湾のスクールソーシャルワーカー協会から招待を受けて、初めて台湾に行きました。8月20日に、台湾、韓国、日本のスクールソーシャルワーカーたちが実践の報告をし合ったんです。台湾は、スクールソーシャルワーカーと言わず、学校社会工作者と言います。韓国は学校社会福祉士です。両国のスクールソーシャルワーカーの研究者たちから、どうして日本はカタカナのスクールソーシャルワーカーの職名を使うんだと、いつも聞かれ困ってしまいます。日本の研究者はアメリカの用語を取り入れるのが好きだからではないかと返答しています。日本も台湾や韓国のように「学校」の用語を使用した職名を考えるべきだったと思います。なお、台湾のスクールソーシャルワーカーたちが、自分たちで制作したユーチューブの動画があります。もしよければ「探索 学校社会工作者」でユーチューブで検索をしてみてください。この「探索」は何かというと、失踪した生徒さんをスクールソーシャルワーカーが探し回るといふものです。

時間が近づいていますが、最後に3つ目です。これは私たちの福岡県ですが、スクールソーシャルワーカー同士の協働によりいろんな開拓的な取り組みができるということです。今回、初めてソーシャルワーカーが学校に入りました。しかし、学校には多くの先生方がいますが、スクールソーシャルワーカーは1人です。そのため、スクールソーシャルワーカーの集団、スクールソーシャルワーカー同士の協働のチームも必要になるわけです。そこで、福岡県では、福岡県スクールソーシャルワーカー協会を作りました。現在、福岡県にはスクールソーシャルワーカーは約100名います。正会員のスクー

ルソーシャルワーカーに加え、賛助会員である近県のスクールソーシャルワーカーやスクールソーシャルワーカーになりたいと思っているソーシャルワーカーを含め、会員数は150名です。スクールソーシャルワーカーになれば、専門性の向上に向けた日々の研鑽が必要になります。そこで、協会では2か月に1回は初任者研修・養成研修・基礎研修・専門研修を開催し、スクールソーシャルワーカーの専門性向上に取り組んでいます。さらにはニューズレターやホームページ「福岡県スクールソーシャルワーカー協会」などにも取り組んでいます。

現在、平成28年度、福岡県では、61市町村のうち55市町村でスクールソーシャルワーカーが配置されています。まだまだ、人数が足りませんが、県立高校は12校です。県立高校でのスクールソーシャルワーカーの増員も望めます。また、私自身はもともとは障害児教育を専攻していたので、特別支援学校でのスクールソーシャルワーカーの配置も望めます。まさに特別支援教育の子どもたちは、教育と福祉がつながった取り組みが望めます。それでは、ちょうど時間になりました。どうぞ清聴ありがとうございます。